

2026年2月15日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教71「愛し抜くために」

ホセア11:1~4、ヨハネ13:1~11

「さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた」(1節)「愛し抜かれた」と訳された部分は、テロスという言葉が使われています。これは終わり、最後までという意味がありますが、「目標」とか「完成」という意味もあります。途中で投げ出すのではなく最後まで愛を貫かれる。愛を完成される。この神さまの愛をこそイエスさまのご受難において受け止めるべきであります。

その愛がイエスさまの具体的な行動に現れています。「食事の席から立ち上がって上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。それから、たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い、腰にまとった手ぬぐいでふき始められた」(4~5節) サンドル履きの足はほこりで汚れています。その弟子たちの汚れた足をイエスさまは水で洗い、そして手ぬぐいで拭われます。おそらく弟子たちは予想だにしない出来事に困惑し唾然としたのではないのでしょうか。足を洗うのはしもべの仕事と言われます。わたしたちの先生がどうしてそのようなことをなさるのか。ペトロに至っては「わたしの足など、決して洗わないでください」(8節)と言います。それは恐れ多いという気持ちなのでしょう。でも同時に恥ずかしさもあつたのではないのでしょうか。誰でも汚いところを見られたくありません。そういう部分は隠しておきたいと思います。イエスさまに洗っていただくより、自分で洗った方が気が楽だ。そういう心境だったのかもしれない。

けれどもここでイエスさまは言われます。「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」(8節) ここから言えることは、イエスさまは、わたしたちを洗われることにおいて、わたしたちとかかわりを作ってくださいということです。それは何よりもわたしたちの汚れをすべて引き受けて、それを洗われることにおいて、壊れていた神さまとの関係を結び直してくださるということです。この足の汚れは、単なる汚れではありません。「既に悪魔は、イスカリオテのシモンの子ユダに、イエスを裏切る考えを抱かせていた」(2節)とあります。ユダは悪魔の誘惑に負けてしまいました。それはあの蛇の誘惑に負けて神さまとの約束を破り、楽園を追放されたアダムとエバの姿を映し出すものでもあります。そこから人類の罪が始まりました。この罪の汚れこそ、弟子たちの足の汚れが示すことであり、この罪の汚れをイエスさまが引き受けてくださることが、ここでイエスさまが弟子の足を洗うという出来事を通して示されているのです。

けれども、わたしたちが何度でも心に留めなければならないのは、イエスさまはここでユダをはじめ弟子たち全員の足を洗われたということです。神さまを裏切り、神さまを見捨てるその全人類の罪の汚れを引き受けてくださった。だからこそイエスさまは十字架で叫ばれました。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と。神さまを見捨てるわたしたちの罪を全部背負って、ご自身が神さまから見捨てられたのです。それによって、わたしたちが神さまに見捨てられないようにしてくださった。それどころか、神さまとのかかわりを回復してくださいました。そのようにしてイエスさまはわたしたちの汚れをあの手で十字架において引き受け贖ってくださったのです。

愛することは、決してきれいごとではありません。相手の汚れも全部引き受ける。その汚れも含めて愛することが求められています。その愛が弟子たちの足を洗われたイエスさまのお姿に最もよく表されています。そう考えますとわたしたちの愛のなんと狭く、何と小さいことでしょうか。愛していると言いながら、相手の小さな過ちすら許すことができない。その小さい汚れ、しみが許せない。自分は神さまから罪という大きなしみ、汚れを洗っていただいたにもかかわらず、相手の小さなしみが許せない。それで人を裁いていく。また自分に都合が良ければ愛することができるけれども、そうでなければ愛せない。そういう自分本位な愛があります。そういう愛とは呼べない狭く小さな愛でわたしたちはたくさんの人を傷つけてきました。それもまた罪です。

わたしたちは全員、一人の例外もなく、イエスさまによって洗っていただかなければならない存在です。「叩けば埃が出る」と言いますが、みんな汚れを抱えているのです。それでもわたしたちはイエスさまによって赦され、愛されています。その恵みに生かされてこそ、わたしたちの愛し方も変わってくるのではないのでしょうか。自分に都合がいいから愛するのではない。どんなに都合が悪くても、自分に不利でも、相手の汚れが気になっても、それでもその汚れをも引き受ける。そういう愛し方がイエスさまによって可能になるのです。

先週は、熊本地区の信教の自由を守る日の集会がありました。中田善秋という人の話でした。中田先生のことは全く存じ上げていなかったのが初めて聞く話に衝撃を受けました。中田先生は、牧師を志し日本神学校（東神大の前身）を卒業してから、いわゆる宣撫工作のためにフィリピンに従軍しました。宣撫工作とは、占領地の住民の思想教化を目的とするもので、宗教もその中に含まれております。宗教班が構成されカトリックの司祭やプロテスタントの牧師たちも現地に行きました。やがて任務を終えて帰るときに、中田先生は「日本とフィリピン両国のかけ橋になりたい」と現地にとどまります。そこで不幸にも日本軍による現地住民の虐殺が起こり、そのことで中田先生は戦犯とされ懲役30年の刑で巣鴨プリズンに収監されてしまいます。先生は虐殺にはかかわっておらず、むしろ住民を助ける働きもしたのですが、やはり日本人という理由で、戦争犯罪に加担したとみなされたのです。戦後、釈放を求める働きかけもあったようですが、中田先生はそれを拒み留置所に留まりました。「日本人の誰かがその代価を払わなければならない」と、その過ち、罪の汚れを引き受けられました。それが真に愛することなのでしょう。

わたしたちは、容易く人を愛するなどできません。相手の汚れを引き受けることなどできない。けれどもイエスさまに結ばれているなら、わたしたちもまたその愛を少しでも現わせるような生き方ができるのではないのでしょうか。またそのように愛するようにわたしたちは招かれています。

天の父よ。愛することに限界があります。けれどもイエスさまがわたしたちの愛することができない罪の汚れを引き受け十字架で死んでくださいました。このイエスさまの愛によって愛されたこと、赦されたことがわたしたちの愛の源です。どうぞこのようにわたしたちが愛されていること、そして赦されていることに気づかせてください。それゆえにだれかを愛することができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。